



作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

### 一生忘れられない演奏会

私の住むライプツィヒは音楽の聖地で、素晴らしい演奏会が多い。私がドイツに来た理由はピアノ留学で、当時から今に至るまでほぼ40年間、音楽会とは切っても切れない縁でつながっている。今回聴いたのは、ブルックナーの交響曲第8番。演奏はゲヴァントハウス管弦楽団で、指揮がヘルベルト・ブロムシュテット、97歳!! 多分一生忘れられない演奏会の1つになりそうだ。ブロムシュテットは、世界中の数々の有名オーケストラの首席指揮者を歴任(日本のN響の桂冠名誉指揮者も)。特にゲヴァントハウス管弦楽団とは縁が深く、ブルックナーの交響曲全9曲の録音もある。

一方、19世紀の偉大な作曲家、アントン・ブルックナーは、壮大な交響曲や宗教曲で有名で、なぜか日本にはファンが多い。

コンサートマスターに支えられながら舞台上に現れた長身のブロムシュテットは、静々と中央まで進むと自力で指揮台に上り、そこにあった椅子にゆっくりと腰かけた。

実はこの日、おまけがあった。少し前にライ



ライプツィヒ・ゲヴァントハウスのコンサートホール

プツィヒの市立図書館で、モーツァルトの未発表曲の楽譜(写し)が発見された。15分ほどの弦楽3重奏曲で、研究家の間では以前からモーツァルトが10代前半に作曲したものだろと言われていたが、確証がなかった。ところが今回の発見が決め手となり、KV648『ガンツ・クライネ・ナハトムジーク』として正式に記載された。一大センセーションだ。そこで急ぎよ、それを室内楽曲に編成したものが、ブロムシュテットの音楽会に挿入されることが決まったわけだ。

ブロムシュテット自身はこれについて、「生まれて98年目の年に差しかかり、モーツァルトの若い頃の作品のドイツ初演を託されたことは思いがけない<sup>たまもの</sup>賜物であり、それがライプツィヒのオーケストラとであることは二重の喜び」と語っていた。この軽快な曲がブルックナー第8番の露払いとして適切であるかどうかは別として、私としては、稀有な<sup>けう</sup>運命の作品をブロムシュテットの指揮で聴けたことが単純に嬉しかった。

さて、その後、再びブロムシュテットがゆっくりと登場。譜面台には分厚いスコアが閉じたまま。ブルックナーの交響曲第8番は、優に80分はかかる大作だ。指揮台のブロムシュテットが静止すると、満員御礼の会場は静まり返り、針が落ちてでも分かるほどの緊張感が立ち込めた。

ブロムシュテットは指揮棒を持たず、大して大げさな身振りもなく、主に手首と指の動きで微妙な指示を出す。すると、その瞬間、ボリュームも、音色も、テンポも、息をするようにごく自然に、何の抵抗もなくフワッと変わった。オーケストラは様々な楽器を抱えた人間の集まりで